HOKKAIDO ARCHITECTS の横顔

PROFILES

vol.03

今号の建築家

大矢二郎 JIRO OYA 02

松橋常世 TSUNEYO MATSUHASHI 06

伊達昌広 MASAHIRO DATE 08

岩澤浩一 KOICHI IWASAWA 10

近況ニュース 12

JIA
北海道支部

旭川で建築教育に尽力、地域の心強い存在に

「すっかりこっちに根っこが生えてね」と言う大矢二郎さんが縁もゆかりもなかった北海道・旭川に来たのは1978年。以来、北海道東海大学（後に東海大学）芸術工学部の歴史と共にあゆみ、地域の建築シーンを体現し、見守っている。

大矢二郎

Jiro Oya

大矢建築研究室 主宰
JIA 登録建築家／ 1989 年入会
フェロー会員（2023-）

略歴
1944年 東京都生まれ。1967年 早稲田大学第一理工学部建築学科卒業。1969年 同大学院理工学研究科修士課程修了。設計事務所主宰の後、1978年 北海道東海大学芸術工学部専任講師。1981年 同助教授。1986年 同教授。2004-2005年 北方生活研究所長。2008年 東海大学教授。2012年 同名誉教授。2016年 赤レンガ市庁舎を活かしたシビックセンターを考える会代表、2019年 三浦綾子記念文学館副館長、等

刺激を受けた学生時代

絵を描くことや鉄道が好きな少年だった大矢さんは、ものづくりへの志向を持ち、進学に際しては土木や機械に進むことも考えられたそうだが、「たまたま建築へ入った」と言う。1963年、東京オリンピックの前年に早稲田大学に入学し、そこで建築の世界に触れて面白さを知っていった。

当時の計画の先生方は、今井兼次・明石信道・吉阪隆正・武基雄・安東勝男・池原義郎・穂積信夫、非常勤では菊竹清訓・大高正人など、「今にして思えば、もっとちゃんと授業を聞いておけば良かった」と言うほどの錚々たる面々。授業の中には一週間課題という短期決戦でアイデア勝負を繰り返すユニークな設計実習があり、とても刺激的だったそう。提出日には、先生方の即刻の講評があったが、その後の学生同士の時間も貴重で、当時、大学と高田馬場駅の間にあった菊竹清訓設計のカフェ「コア」に雪崩れ込み、自主講評会をしたと言う。

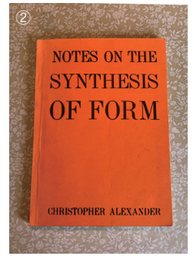
「先生は褒めていなかったけど、俺はお前の作品を評価するぞとか、コーヒー一杯で3時間くらい喧々諤諤やる。今思うと、あれは面白い経験でした」。

その一方で、学費の値上げを発端に第一次早大闘争が勃発。その時、理工学部長だった吉阪隆正さんが、教員にも矛先を向ける学生を拒否することなく、凛として真摯に話し合いに臨み、混乱を乗り切った。「人間的なスケールが本当に大きかったですね」と、吉阪さんの人間力を感じたそう。

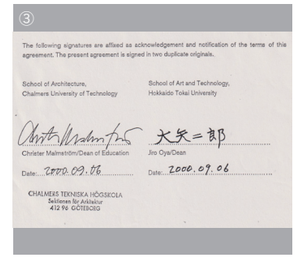
紛争に巻き込まれつつも、友人とテントを担いで九州や四国、東北などへ貧乏旅行をしたり、大学から近い新宿を飲み歩くなど、大学院時代も含めてよく遊んだのだとか。後に吉阪さんの著書に『あそびのすすめ』（吉阪隆正 著／勁草書房、1986年発行）があるのを知り、「あながち間違ってもいなかったんだな」と笑う。

大学院に進んだのは、そういう自由な境遇にもう少しいたいという「一種のモラトリアム」と言う。修士課程では、クリストファー・アレグザンダーの『Notes on the Synthesis of Form』（形の合成に関するノート）に面白さを感じ、まだ和訳本がなかったことから、自ら翻訳（後に稲葉武司による翻訳書が鹿島出版から出た）。アレグザンダーのデザインや建築に対する合理的な判断、徹底的な機能主義とも言える考えに共感し、当時の建築の工業化や公害問題を絡めて論文にまとめた。それを並み居る先生たちの前で発表して、吉阪さんには辛辣な批判を浴びたそう。しかし、「僕の恩師である安東先生もそういう（アレグザンダー的）立場でものづくりをする人でしたから、非常に評価してくれてね」と、論文のベースになった翻訳の書籍化を出版社に掛け合ってくれたことも。出版は実現しなかったが、修論の発表会を見ていた数人の後輩が興味を持ち、なんと和文タイピングと製本化をしてくれて、それが研究資料として全国の大学に出回った。

その後、博士課程にも進むが、早々と1級建築士の試験に合格したことから、友人と原宿で設計事務所を開設、大学院は単位取得退学をしたそう。



①事務所の書棚に並ぶ『吉阪隆正集』。その第16巻が『あそびのすすめ』 ②大矢さんが翻訳、後輩により製本化されたC.アレグザンダーの『Notes on the Synthesis of Form』 ③スウェーデン・ヨーテボリにあるシャルマス工科大学建築学部との交流協定書。学生や教員が対象で、当時、芸術工学部学生だった建築家・田根剛さんもこの調印直後に同校で学んだ。


The following signatures are affixed as acknowledgement and notification of the terms of this agreement. The present agreement is signed in two duplicate originals.

School of Architecture, Chalmers University of Technology — Christer Malmström/Dean of Education — Date: 2000.09.06

School of Art and Technology, Hokkaido Tokai University — Jiro Oya/Dean — Date: 2000.09.06

CHALMERS TEKNISKA HÖGSKOLA
Sektionen för Arkitektur
412 96 GÖTEBORG

旭川へ。新たな教育の場を創る面白さ

数年後にはその事務所を離れ、埼玉県で自らの設計事務所を主宰していたが、偶然、旭川で教員募集があることを知り、直感的に魅力を感じて手を挙げたそう。それが北海道東海大学で、短大から4年制になってすぐの1978年春、計画系の教員として着任した（設計事務所は畳むことが条件だった）。同年8月には、教員住宅が完成したのを機に家族を旭川へ呼び寄せた。北海道にはまだ足を踏み入れたことがなく、旅先として何となく残してあったこともあり、「運命的なものを感じましたね。結局、人生の半分以上、この地に住むことになったわけです」と言う。

北海道東海大学は小規模ではあるが、位置付けは独立大学。新学部の芸術工学部でカリキュラムなどを自分達で一から創出できるのも魅力だったとか。特に10万坪を有する自然豊かなキャンパスの環境を利用した授業として考案したログハウスを建設する「建築総合実習」は、学生が設計から材料の加工、建設までを行うもので、特色ある教育となった。時には一学年では完結せず、複数学年に渡ったケースもあったそう。

開学10周年（4年制になって10年）の記念事業では、モロッコの集落調査を企画。大矢さんは調査隊長として他の教員と共に現役学生、卒業生や一般参加者を率いて、サハラ砂漠北辺の集落や古都フェズ、首都ラバトなどを巡り調査を行った。

また、東海大学はヨーロッパにおける学術・文化交流拠点としてヨーロッパ学術センターをデンマークに設置していることから、同国を何度も訪れて建築のみならず暮らしの豊かさや質の高さに触れた。さらに、旭川キャンパスは芸術工学部であることとデザイン教育の環境が整っていたことから、スウェーデンの難関校であるシャルマス工科大学建築学部との交流協定が結ばれるなど、北欧の大学を中心に学生や教員の交流も実現した。「そういうのも、ここが小さなキャンパスで独立性が高かったことが大きかったんですね」と言う。そんな環境の中、大矢さんが学内の北方生活研究所の所長を務めた際には、ヨーロッパ学術センターを会場に国際シンポジウムを企画し開催した。また、現在は旭川デンマーク協会の会長として、3年おきくらいに研修ツアーを開催するなど、現地との関係を続けている。

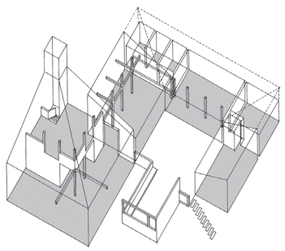
地域の建築の在り方、気候を織り込んだ住宅の実践

教育の一方で、いくつか建築の設計をする機会も訪れた。

旭川郊外に建設された『ユニオン・コンピュータサプライ社屋』では、一般に積雪寒冷地には相応しくないとされるコートハウス形式をあえて採用し、木製デッキを設えた中庭を囲むようにオフィス空間を設けて、コート側に開口部を集約して大きく開放し、その形式の魅力を表現した。

美瑛町の『白金インフォメーションセンター』では、町が当時推進していた「ビルケの森」構想の拠点施設を建設するため、北方生活研究所を通して設計に携わることに。観光や小イベント会場に利用できる場として、石とコンクリートと木を構造や仕上げに効果的に用いた空間ができた。冬には窓の外の雪を背景に炎を楽しむ仕掛けとしての暖炉を作り、「北海道のライフスタイルに非常にマッチしている気がしてね」と、以降もさまざまな建築で暖炉や薪ストーブにこだわってきたよう。この施設は、現在は「道の駅」として活用されている。

学内の『北海道東海大学芸術工学研究館』の建設が計画され



ユニオン・コンピュータサプライ社屋（上2点／1980年竣工／左の空間構成図提供および右外観撮影：大矢二郎）。交通量の多い道路に接する敷地で交通騒音が心配されたことから、道路側は極力開口部を小さく閉じた印象だが、コート（中庭）に向けては室内を大きく開放している。『作品選集1992』（日本建築学会、1993年発行）に掲載

白金インフォメーションセンター（右3点／1992年竣工／撮影：大矢二郎）。共通の基壇（石積み仕上げ）に3棟が載る。コンクリート・コアに木造躯体を添わせ（混構造）、木造壁部をカーテンウォールとして木製サッシを外付きにし、構造要素を室内現わしに。『作品選集1994-1995』（日本建築学会、1995年発行）に掲載、平成6年度 北海道赤レンガ建築賞

た際には、それまでの施設計画（山田守設計の1号館など）がほとんど東京の大学本部の主導だったのに対し、当時の学長の提唱によって芸術工学部の教職員が基本計画・基本設計を担うことになり、建築学科主任になったばかりの大矢さんが取りまとめを担当することに。学内にはデザイン実習の工房など内装の造作や家具を自前で製作できる環境があったことから、“育てる建築”をコンセプトに、RC造として各研究室をコンクリート打放しの状態で引き渡し、じわじわと時間をかけて完成させていく方針としたそう。また、この地域ならではの建築の作り方をしたいと考え、道内企業による木製サッシの採用や暖炉の設置、外光の注ぐ広場的なアトリウム空間を設けた。さらに、旭川で大型建築への実績がまだ少なかった外断熱工法を導入。それは、当時、北海道大学で建築環境の研究をしていた荒谷登さんの理論の実践でもあった。その効果は絶大で、事務課から他の施設よりも暖房の燃料消費量が少ないと喜ばれたそう。

大矢さんはその手法を自邸『西神楽の家』の設計にも活用した。その頃、非常勤で環境の講義に来ていた荒谷さんの話を聞いてすっかり魅了され、「ここで外断熱をやらなくてどうする」と、外断熱のコンクリートブロック造（内外にブロック表し）とした。コンクリートブロックの蓄熱性の高さから、冬の暖かさはもちろん、夏の効果も顕著だった。旭川は昼夜の気温差が比較的大きいため、涼しい夜に壁体を冷やすことで、翌日の日中に外気が30℃になっても簡単に室内環境が変わらないという荒谷さんの教えは本当だった。これは、大矢さんが考えていた地域に相応しい建築の在り方、気候を織り込んだ「旭川型住宅」の実践にもなった。それまで住んだ教員住宅（1978年築）のアルミサッシの酷い結露などに見られた環境性能の低さとは雲泥の差。それは、大矢さんが旭川に来た頃から北海道の建築が目覚ましい進歩を遂げたことの実践例でもある。

自邸の設計と同時期に、『三浦綾子記念文学館』の設計にも関わった。学部長を務めていた頃で、かつて一世を風靡した小説『氷点』の作者・三浦綾子の記念館を、小説の舞台となった「外国樹種見本林」の一角に、市民運動により建設・運営する計画が進んでいた。しかし、建築のデザインに行き詰まっていた実行委員会から知恵を借りたいと打診があり、（北方生活研究所を通じて）設計監修をすることに。実行委員会が進めていた案の代替案となる模型を提示して、既に設計を受注していた建築家4人と共に実施設計をまとめた。開館して25年経った現在も文学館には多くの人が訪れているが、施設はあさひかわデザインウィークのイベント会場などにも活用されている。

北海道東海大学芸術工学研究館（左2点／1993年竣工／撮影：大矢二郎）。ギャラリー、暖炉のある談話室、大学院生室、研究室、アトリウムが4層の中に構成されている。スケッチを描き始めた頃から、大矢さんが好きなルイス・カーンの建築の雰囲気を持ち込むことを意識したそう。閉校後は旭川市が管理、利活用が待たれる。第2回 旭川市都市景観賞（1993年度）、日本建築学会北海道支部 第20回 北海道建築奨励賞（1994年度）

西神楽の家（右2点／1998年竣工／撮影：大矢二郎）。旭川の厳冬期は低温・多雪のため、地盤に近い壁体の耐久性を高めるためにも1階を補強コンクリートブロック造（外断熱、内外ブロック2重積みの壁厚390mm）に。2階は木造在来工法。住宅内のパブリックスペースを生活用（左）と事務所用に分ける2公室住宅の手法を採用

地域の心強い存在に

大矢さんは2012年に大学を退職した。その2年後、東海大学の組織改編によって旭川キャンパスは閉校した。「結局、旭川の東海大の全歴史を僕は体験していることになるね」と言う。

退職後は、自宅の一角を設計事務所として活動している。多くは社会活動で、旭川市景観審議会長をはじめ、地域の各種団体・組織の委員や理事、会長、アドバイザーなどを歴任。「年寄りだからじゃないですか。実際に動いている仲間内では年長だから、実行委員長とかという役割になっているけども」と謙虚な様子だが、JIA北海道支部の旭川地区会の活動においても心強い存在となっているようだ（2023年よりフェロー会員になった）。

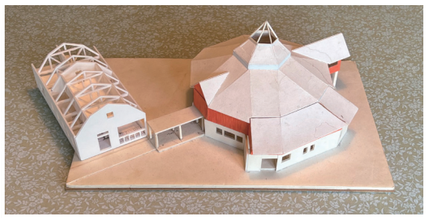
中でも2016年から旭川市総合庁舎（1958年築、佐藤武夫設計）の保存・活用を目指す「赤レンガ市庁舎を生かしたシビックセンターを考える会」（以下、「考える会」）の代表となり、耐震性の脆弱さを理由に解体の方針を出した市に対して新たな提案や市民向けの周知活動など（展覧会、等）を行っている。

赤レンガ市庁舎は、戦後の旭川における行政拠点であると共に街のシンボルとして市民に親しまれ利用されてきた建物。設計者が少年時代を過ごした旭川の原風景（灰色の空と白い雪の中に建つレンガの建物）からインスピレーションを得て、地域固有の形を求めた結果、生まれた。意匠性だけでなく寒冷地に建つことを考慮して（風雪に耐えられるよう試験を行って）設計されており、1959年に日本建築学会作品賞、2003年にはDOCOMOMO JAPAN「日本におけるモダン・ムーブメントの建築100選」に選ばれるなど、建築的・文化的評価も高い。また、特徴的な打放しコンクリートとレンガによる意匠は市内の学校建築にも波及するなど、その影響力は大きかった。

「考える会」による新たな提案は、赤レンガ市庁舎を残し、市が予定する新市庁舎の規模を抑えて隣に建設し、新旧の庁舎を併せて市民が活用できるシビックセンターを構築するもので、「旭川市の新たなシビックセンター整備に関する提言」として市へ提出された。また、解体の理由となった1997年の耐震診断がそもそも間違った資料に基づいた結果であることを指摘して見直しを訴えている（2023年1月、市長が保存の道を模索するも断念の表明が報じられた）。

大矢さんが旭川に来て45年が過ぎた。今では地域になくてはならない人物となっている。旧知の友人から「東京に戻らないのか」と聞かれると、次のように答えていると言う。

「自立した暮らしができている限り、死ぬまでこっちにいるぞ」。



三浦綾子記念文学館（左・上／1998年竣工／左外観撮影：大矢二郎）。上は竣工予定の1年前に話が持ち込まれた際に、実行委員会に提示した模型（右部分）。模型の左部分（別棟）は2018年に開館20周年事業の一環として増築された分館。第4回 旭川市都市景観賞（1999年度）

旭川市総合庁舎の歴史や利活用の提案をまとめた冊子『旭川赤レンガ市庁舎の軌跡と未来〈改訂版〉』（JIA北海道支部、2022年発行）。大矢さんはテキストを担当

建築は深いもの。面白い世界に入ったなぁ

「考えることがいっぱいあって、
昔よりずっと忙しくなっているんです」と話す松橋常世さん。
新たなテーマを見つけ、自身そして建築を深く見つめ、
次なる建築の表現活動に勤しんでいる。

松橋常世

Tsuneyo Matsuhashi

（有）松橋常世建築設計室 代表取締役
JIA 登録建築家／ 1987 年入会
シニア会員（2022-）

略歴
1947年 秋田県生まれ。1973年 武蔵野美術大学造型学部建築学科卒業。ゼネコン入社。1978年 倉本たつひこ建築計画室入所。1983年 アトリエアーキザン設立。1987年 松橋常世建築設計室設立。1992年 有限会社に改組。受賞等：1993年 札幌国際デザイン賞準大賞、1994年 HDC商業デザイン最優秀賞、2009年 下川町21世紀環境共生型モデル住宅コンペ入賞

囲まれたところから出たい

松橋さんが生まれ育ったのは秋田の「閉鎖的な盆地の田舎町」と言う。水平線や地平線に憧れ、「囲まれた所から出たくて」と脱出を願っていたそう。その機会は大学進学時に訪れた。子供の頃から細かな作業や描写が得意で、最初は家庭環境から医学の道を目指していたが、「昔から絵が上手いんだから、美術学校はどう？」と言う母親の助言で方針転換。武蔵野美術大学（以下、武蔵美）を受験することに。そもそも理系だったので受験科目に数学のある建築学科に決めたのだそう。筆記試験よりも難関と思われた実技試験（デッサン）が得意な細密画だったので手応えを感じ、続く面接で若き教員の建築家・竹山実さんからの建築に関する質問をうまく切り抜け合格した。

武蔵美は、自由な気風であったのに加え、いわゆる70年安保闘争の学生運動華やかなりし頃で授業がほとんどなかったことから、「爆発しましたね」と、解放感に溢れたよう。特にその頃は学外でいろいろな人に出会えたことがよかったとか。闘争が沈静化してからはようやく授業も始まり、竹山さんのゼミと保坂陽一郎さんのゼミを掛け持ちして、卒業した。

北海道へ

東京でゼネコンに就職し、研修で北海道へ。最初は嫌だったが、来てみると札幌は都会ながら空気がよく、道内では地平線も見られる。さらに札幌出身の竹山さんから「北海道にあなたの先輩（武蔵美）の倉本君がいる」と聞いて、札幌で設計活動をする倉本龍彦さんと出会い、すっかり北海道に居着いてしまった。

ゼネコン勤務中から倉本さんのアトリエ（倉本たつひこ建築計画室）を手伝うようになり、ついには就職。かの有名なニセコの『ばあちゃん家』（1971年設計）が竣工した頃には松橋さんもよく行ったそうで、地面に斜めに刺さったような建物を地元住民が窓の外から覗いて「あら、床は平だわ」などと言う場面にも遭遇したとか。まだ素朴だったニセコも今や「騒がしい町になっちゃったね」と憂う。当時のニセコには、武蔵美同期の鈴木敏司さんや染谷哲行さんなど（アトリエアク初期のメンバー）が作った山小屋に建築・美術・文学関係の人たちが集っていたそうで、そこに松橋さんも混じり、北海道でのつながりが広がっていったとか。後に関わることとなる、SF作家としてデビューしたばかりの荒巻義雄さんとも、そんな状況下で出会っていた。

松橋さんが描いた宇宙船（未来都市）。荒巻義雄さんのSF小説『ビッグ・ウォーズ』シリーズに登場（後にCG化したもので、元画は徳間書店1983年発行『SFアドベンチャー』掲載。CG：中野正一）

倉本さんの下では、商業施設や住宅を担当。他にさまざまな経験をして5年程で独立した。「倉本さんは枠にはめられない人。そこを学んだかな」と言う。

宇宙船から建築まで

独立したての頃に、荒巻さんから「仕事がないなら、SFの挿絵でも描いてみるかい？」と、声をかけられたのを機に、荒巻さんの小説に登場する宇宙船や未来都市などを描くことに。根拠のないものではいけないと、SF好きで構造計算のできる人の協力も得ながら建築の専門性を生かして、数ヶ月を要する絵を下書きから完成までいくつも一人で描いたそう。「ほんと食えなかったんですけど、楽しかったですね」と言う。2023年、荒巻さんは第43回日本SF大賞を受賞した。

次第に人との出会いやつながりによって設計の依頼も増えていった。住宅が中心だが、お施主さんとは長く付き合う傾向にあり、設計した建物の増築や改修、子世代の家を頼まれることもしばしばとか。他に、古い建物や商店街の再生プロジェクトに参加したりも。

設計において大切にしているのは、「時間に耐えられることかな。代替わりをしても平気で使えるとか、人が静かに考えられる場所になることがとても大事です」と言う。さらに、「ルッキズムの風潮より、屹立する精神性が求められるべき」と、見え方ではなく、より精神的に求められる観点から建築を見つめたいとも。

言葉に打たれ、思考を深める

松橋さんは言葉を重視する。建築家・前川國男さんの言説を好み、「今の時代も受け継がなきゃいけない大事なものを全て語ってるんです」と言う。“一にも二にも「良き建築家」の排出を祈る。一羽の燕は未だ春を告げることはできない”（1942年）という一節は、「JIAの若い人たちに伝えたい言葉」だそう。もう一節、“建築界の状況で最も根本的な問題は、建築における「精神」の問題に対する無関心であると言えます”（1968年）を挙げ、現在のグローバル経済に取り込まれた建築や高度消費社会での設計に思考の欠如を感じることと重ねる。また「ある時、ルイス・バラガンの“静けさに満ちあふれた住まいを作ることは建築家の使命”という言葉に出会った。空間の定義、建築の在り方などを言い表していて、心を打たれましたね」と、しみじみ話す。

また、15年程前にある哲学者と知り合ってから、その方の著書や関係する本を読む中で、建築への深い想いを反芻したり考え直すようになったとか。建築は深いもの、生身の人間を扱うものであり、医学よりもっと扱う領域が広く、「面白い世界に入ったなぁ」と思っているそう。

宮の森の家Ⅰ（上／2004年竣工）、宮の森の家Ⅱ（下／2008年竣工）（撮影：上下とも酒井広司）。親世帯の家（Ⅰ）の4年後に子世帯の家（Ⅱ）も同一敷地内で依頼された（Ⅱの窓からⅠが見える）。屋根の塗り替えなど、手入れ（メンテナンス）のために頻繁に訪れている

西野の浮かぶ家（1999年竣工）。敷地の高低差を利用し、かつ以前に存在した住宅の痕跡（時間の痕跡を残す）の上に浮かぶように建つ。コンパクトで機能性を高い空間、人間本来の時間を取り戻せるような空間や住むことの意味を考えて設計

“見える建築”と“見えない建築”

今は考えることが楽しく、「建築を含め、そもそもそれを考えている私自身とは一体何か」という問いが頭を離れないと言う。そこには主観的な自己から離れた世界が立ち現れてくるそう。

建築においては、“見える建築”と“見えない建築”という言葉を与えることによって、建築そのものの所在が見えそうな気がするのだそう。「“見える建築”というのは社会的に現象する建築一般を指し、“見えない建築”とは、何故人はそもそも建築をするのかという初源的な問題を含めて、建築という大きなフィールドを精神として捉えること」と説く。言語による表現行為とも言え、それも建築活動と考える。「言葉は永遠だが、ものはいつか無くなるんです。それがヒントかな」と言う。この言葉によって離れたところから対象を見ることができ、客観視するような別の自分を感じるのだそう。そして、この2つの関係には「間（あ）」のようなものがあり、それは具体的には日本の建築に見られる借景や縁側、外界と内界の中間領域に似て、領域を広げる役目を持っていながら、両者をつなぐもの、つまり「能動的不在」の関係と似ていると語る。自身についても、「仕事をする自分と思考する自分の関係にようやくつながりをつけられそうな気がしている」と言う。

さらに、「考えること」を続けながら曖昧だったことをもっと明快にできたらと、その「言葉」を探し続けている。

一石を投じられるものがないと、僕達の生き様がないのかな

環境性やコストコントロールの確かな視点と共に、
空間性を大事に建築を思考する伊達昌広さん。
“新しもの好き”から「やっぱり最初がいいよね」と、
時に斬新に、建築家としての先んじた試み・提案に意欲的だ。

伊達昌広

Masahiro Date

（有）伊達計画所 代表取締役
JIA 登録建築家／ 2002 年入会
卒業設計グループ（2006-）

略歴
1958年 札幌市生まれ。1981年 北海道工業大学建築工学科卒業。LDヤマギワ研究所勤務。（株）URB建築研究所勤務。1987年 建伊達計画所 設立。1995年 有限会社伊達計画所として法人化。受賞等：1996年 農村景観にふさわしい農家住宅コンテスト 入賞、INAXデザインコンテスト新築部門 入賞、2002年 日本建築家協会北海道支部住宅部会フキノトウ賞、2016年 北海道デザインアワード2016 会員部門 優秀賞、等

意匠設計を知る。環境系への関心も

寿司店を営む家に育ちながらも、客に「御愛想を言うのが大っ嫌いで」と言う伊達さん。ものづくり系のコンクールなどで受賞するような子供だったが、テレビコマーシャルで見た清家清さんがきっかけで建築家の存在を知ったそう。中学の先生のちょっと間違った情報から図面だけを描いてお金になる職業だと勘違いしたそうだが、清家さんの情報を得るためにブルーノタウトやグロピウスを知り、楽しくなっていったのだとか。

高校の先生の推薦もあって、北海道工業大学（現・北海道科学大学）へ進学。計画系の思考を好んだが、3年生の設計演習で建築家の圓山彬雄さん（非常勤講師）と出会ったことで、「圓山さんにめちゃめちゃ感化されたところはあります。意匠設計というのがあるんだと」と、意匠への関心が高まったそう。また、圓山さんが江差町で行う歴史的な建物や街並みのデザインサーベイに当時常勤講師の小室雅伸さんや他学生などと参加し、建築家仲間の山小屋に寝泊まりするなど交流を楽しむ機会も得た。その後、小室さんのゼミに入り卒業設計に取り組む。しかし、とても厳しく、奮起しながら向き合った。「時間の美術館」をテーマに、時間の経過で変わっていくものを表現できる場を目指したが、伊達さん曰く「難しすぎて途中で破綻しました」。

一方で、環境系も得意とし、熱損失について学ぶことが作りたい空間性に結びつくと考え、それは「他との違い、武器を持っていないとダメ」という視点によるものでもあったそう。

照明デザインを経由して建築設計へ

卒業は1981年、アトリエ系設計事務所への進路も考えたが、北海道ではまだ極少数の上に就職難で決断に至らず、プロダクトへの興味からデザイン職を思い描いてLDヤマギワ研究所に就職した。東京で種々の研修を経てホテルの照明デザインも経験。しかし、求められたのはセールスエンジニアで、要は最も避けたい営業職だった。それで半年弱で辞めたのだそう。

無職になり転がり込んだのは圓山さんの事務所（アーブ建築研究所）だった。「半年以上、諸生さんように行ってました。無休でいいですから入れてくださいって言って」と。

一連のブロック造住宅（外断熱、内外ブロック二重積み）で知られる圓山さんだが、まだ初期の頃で、入所した伊達さんは主に木造を手掛けながら外断熱の実践や公営住宅などを担当した。次第にもっと大きなプロジェクトを経験したくなり、転職を模索。ちょうど体調を崩したこともきっかけで退所したそう。

ところが、いわゆるバブルの真っ只中で、アルバイト的な仕事が舞い込み、必要に迫られて独立。当時すすきので話題の『ノアの箱船』（設計：ナイジェル・コーツ、1988年）や『北倶楽部』（設計：弾設計、1990年）のインテリアの実施設計に携わることとなった。前者は外断熱が採用されていたため、知識のある伊達さんは枠を超えて施工者に頼りにされてしまったそう。また、後者はザハ・ハディドの初実作の店舗が入ったことで知られるが、ザハのデザインを実質的に形にしたのは伊達さんだった。

空間性、環境性、コストコントロール、新たな試み

しばらくインテリアの仕事が続いたが、建築の第1号となった『林歯科』（併用住宅）の設計をプロポーザル方式で獲得。要件とは違った提案をしたところ、気に入られたそう。これが新聞に載り、数件の設計依頼が来たが、そのうちにネタも尽きると思い、その時の考えを詰め込んだ自邸『D-HOUSE』を作った。「変なことばかりやってね。雨は漏るし」と言うが、他人と被りたくない“新しもの好き”もあって、特に外装で板金防水、樹脂モルタル、道産の杉板を先んじて試用（後に知見を活かす）。今度は全国誌に載り、問い合わせが全国から来たのだそう。

その後も住宅、公共施設、診療所、工場、店舗など多種多様に手掛けている。そんな伊達さんが重んじるのは、空間性、エネルギー面（環境性）の考慮、しっかりとしたコストコントロール、新たな試み（以下、特徴的なものを取り上げる）。

『アミハウス』では、低予算ながら2層のテラス部分を虫除け用にステンレスの網で覆い、半屋外空間を作り、夏は網の影が暑さを和らげること、冬は網に付着した雪による断熱空間となることや雪との新たな付き合い方を思考した。

初のオール電化住宅（施主希望）『a,i,a』では、木造だが1階外皮部をコンクリートの外断熱とし、内側を入れ子状の空間構成にして、蓄熱量を保ち電気代を抑えることに挑んだ。

一番作りたい空間の実現となった『うどんの五右衛門 由仁店』は、畑の中にぽつんと建つ建築が風や寒さの影響を回避するには入り隅を作らないことだと考え、オーバルの形態で温度分布のムラをなくす空間を提示した。

『新栄クリエイト本社ビル』は、環境的な成果が最も表れ、CASBEE（建築環境総合性能評価システム）の太陽光発電設備なしの評価で高レベルのAランクを獲得。予算など制約の中で、地中熱利用、日射遮蔽、雪庇切り対策、大きなオフィス空間の光環境や温度環境作りに取り組んだ。以前の社屋より気積が4倍になったが光熱費は変わらないという結果が出たそう。

また自由に提案したい

近頃は同じパターンを欲する人やコスト、工法などによる制限から発展性が少なくなっていると感じ、勝手に「こんなのどうですか？」と、また自由に提案したいと思っているそう。特に「煉瓦を使って表現したい」と言う。煉瓦には質感や厚み、地産地消性、蓄熱性（熱損失の軽減）といった環境性の魅力がある。そう思うのには、趣や風情が投射される空間への評価の必要性や建築家が地域の文化的資産として後世に残る建築を作るべきとの考えがあるよう。そして単に作るのではなく、「一石を投じられるものがないと、僕達の生き様がないのかな」と言う。

JIAの活動では、全国学生卒業設計コンクールの実行委員長を2022年度まで務め、建築家が運営と作品評価をする大会の有意義性を保つこと、その在り方に向き合ってきた。学生には、いいものを見て感じ、空間性を大事にすること、さらに卒業設計ではアンチテーゼを加えて欲しいと伝えているそう。「問題意識を持たないことには、それは建築とは言わないよ」と。

①アミハウス（2001年竣工）。網で囲われたテラス空間（2002年 日本建築家協会北海道支部住宅部会フキノトウ賞）　②a,i,a（2004年竣工／撮影：並木博夫）。入れ子空間を囲う廊下（スロープ）に床暖房を、他はパネルヒーター（電気ボイラーを使用）を入れ子の内側に設置。気流も逆手にとり少ない換気量で暖気が循環　③うどんの五右衛門 由仁店（2014年竣工／撮影：並木博夫）。大地の中の生命体としての建築を目指したそう　④⑤新栄クリエイト本社ビル（2020年竣工／撮影：佐々木育弥）。外観の上部張り出し部分（上部が開いている）に日除けと雪庇切りの機能を持つ

設計・教育・研究の道に導かれて

恩師との旅を契機に建築に目覚めたという岩澤浩一さん。
スイッチが入ってからの邁進がチャンスを呼び込み、
現在の設計・教育・研究のマルチタスクにつながっている。

岩澤浩一

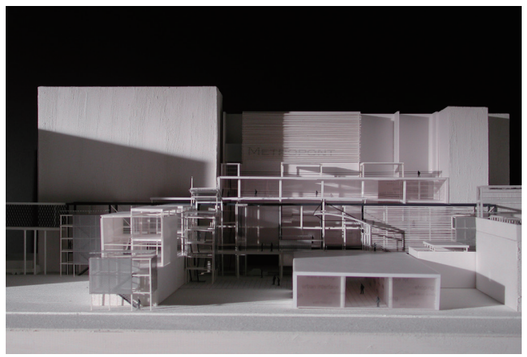
Koichi Iwasawa

北海道科学大学工学部建築学科 准教授
iwasawa design 代表
2022 年入会
建築学術グループ（2022-）

略歴
1978年 天塩町生まれ。2003年 北海道工業大学大学院工学研究科建築工学専攻修了。（株）山本理顕設計工場 入社。2010年 id一級建築士事務所 設立。2015年 東京理科大学工学部建築学科助教。iwasawa designに改組。エトルデザインディレクター。2019年 北海道科学大学工学部建築学科 准教授。受賞等：2001年 日本建築学会卒業設計北海道支部卒業設計優秀作品（大学の部）金賞、2014年グッドデザイン賞、等

建築への目覚め、周囲からの刺激

岩澤さんが建築に目覚めたのは、北海道工業大学（現・北海道科学大学）の２年次に参加した建築工学科のヨーロッパ研修旅行の時だった。「旅の途中で引率教員の佐藤孝先生と同郷（天塩町）だと知って運命めいたものを感じました。佐藤先生が各地の建築を熱心に伝えてくれて、建築は面白いなと思ったんです。そこからスイッチが入りました」と言う。それから設計演習に力を入れ、４年次はもちろん佐藤ゼミで卒業設計に励んだ。



Metropont（都市の橋）（2001年、卒業設計）。都市空間に歩行空間や広場を立体的に設け、古い建物へも介入するようなプログラムを考えた

当時、道内の建築学生（北海道工業大学、北海道大学、北海学園大学、室蘭工業大学）が参加する「ワークショップSOY」での相互交流や、佐藤孝さんと大学OBが協働し設計していた学内の新棟建設の模型制作を手伝うなど、刺激ある環境にいたことから、より建築に対して自覚的になっていったそう。

卒業設計は、パリのラ・ヴィレット公園の国際コンペ（1982年）で１位を獲得したバーナード・チュミ案と２位OMA案に影響を受け、都市空間に展開するプログラム作り出したいと考え、立体的な歩行空間や広場が展開する作品を制作。日本建築学会北海道支部の卒業設計優秀作品の金賞となった。

そして大学院へ進学。その決断では、卒業設計の指導教員の一人で修士論文の主査となる後藤達也さん（アトリエブンク創設者の一人）からの言葉が背中を押したそう。実務の設計を始めて10年後くらいにその人の内にある考え方や強さが出てくる時期があり、大学院でそれを探すことは設計の世界では必要だろうという助言だった。M1では故郷の天塩川河畔を敷地とするプロジェクトや設計コンペへの参加を通して自身の建築設計を模索した。M2では卒業設計以降の作品を俯瞰し、修士論文「決定要因をめぐる諸概念についての考察-自己の設計思考と建築家の言説をとおして-」に取り組んだ。また、M2の年に赴任した川人洋志さんとの出会いが世界を広げ作品にも影響したそう。「佐藤孝先生、後藤達也先生、川人洋志先生との出会いが僕をより広く深く建築の世界に導いてくれた」と言う。

河畔の家（右２点。2021年竣工／撮影：佐々木育弥）。そばの川に架かる歩道橋に続く小道と河畔に広がる公園に面して建てた自邸。断熱ラインの周りにどのような空間を纏うことができるかを考えることで、もう少し開かれた建築の有り様や、周囲を取り込んだり、周囲に影響をおよぼすような建築の存在について思考。非断熱エリアに柱梁などの架構を表出させ、そこにできた空間に設けたベンチが小道を往来する人との接点になったり、架構によって住宅の領域が拡張された感覚を得られる

山本理顕さんのもとへ。愚直に頑張る

卒業設計に取り組み始めた頃、『公立はこだて未来大学』（設計：山本理顕設計工場）が完成、ゼミの仲間と見学に行った際、その空間に圧倒され山本理顕さんを強く意識するようになったそう。

札幌の設計事務所でアルバイトやオープンデスクも複数経験したが、「山本さん（山本理顕設計工場）はどうやって建築を設計するのか見てみたい」と、思い切って佐藤さんに相談。１週間ほどだったが、オープンデスクの機会を得て、多くの学生が来ている中、当時進行中の『はこだて未来大学研究棟』の関連模型などを作成。合間に自分のポートフォリオを多忙な山本さんに見てもらおうと画策し、何とか最終日の前日に思いが届いた。翌日それがスタッフにも披露され、好印象だったようで、「もうちょっとやっていったらどうなの？」と言われたそう。帰りの航空券があったが、翌朝、「帰るのやめました」と言って延長した。それから図面描きにも懸命に取り組み、就職へとつながったのだそう。

入社時は『北京建外SOHO』、『CODAN東雲』、『横須賀美術館』、『邑楽町役場』などのプロジェクトが進行する時期。先輩や同期は皆優秀な方ばかりで、「自分は愚直に頑張るしかない」と必死に努めたよう。最初は『はこだて未来大学研究棟』のチームに配属され、次に『福生市庁舎』でPCや３次元スラブの構造、サッシュやルーバーの開発などを担当。『福生市庁舎』の竣工を皮切りに卒業を考えたが、『ドラゴンリリーさんの家』の現場に途中参加することになり、住宅の経験もできた。そして独立。山本さんの下で６年弱、建築に対する根源的な思考に触れて、「建築を作る姿勢を学んだと思います」と言う。

東京理科大学で企画したイベント「AFTER HOURS」の記録をまとめた冊子も手がけた（企画・編集：岩澤浩一、高佳音。web版 https://afterhours-tus.com も作成）。若手を中心に助教・補手や学外のゲスト講師が放課後にレクチャーを行う企画で「大学の世界に仲間ができました」と言う

建築設計に加えて教育・研究の道にも導かれ、母校へ

独立後は、住宅、病院、店舗など、さまざまな設計の機会を得ている。設計の仕事に加えて、2013年にはピンチヒッター的に東京理科大学の非常勤講師を半期勤めた。2015年に同大学で助教の公募があり、応募することに。設計実務の実績を評価されて建築学科所属の設計助教になり、設計の授業やそのマネジメントなど、初めてのことに奮闘。授業以外にも放課後のレクチャーシリーズ「AFTER HOURS」を発案し、３年間で学内外から延べ人数700名ほどが参加する企画となった。同大学では第一線の方に揉まれながらも、楽しかったそう。

その４年目に、母校の北海道科学大学の意匠系教員の公募にエントリーして採用となり、かつての学舎で教育・研究に関わる機会を得た。現在、M2時代に建築の世界を広げてみせてくれた川人さん（隣のゼミ）と意匠設計の教育に力を注いでいる。

「僕は、人生の分岐点で多くの方達に機会をいただいた」と、要所要所で得た機会をしっかりと生かし、ひたむきに取り組んでいる。

３つの車輪で

設計活動も継続している。2021年には札幌で自邸『河畔の家』が竣工。「柱の表出による外部を纏う建築」をテーマに、非断熱エリアの木架構を外部環境に表出させる表現を試みた。

北海道に戻って改めて「北海道の環境を舞台に普遍的な建築の在り方を探求したい」と言う。その一方で、PCをテーマにした研究（現代日本のPC部材を用いた建築の通時的変遷についての研究）も進めている。

「設計・教育・研究の３つの車輪でやろうかなと思っています」と、相乗効果を狙ったマルチタスクで邁進している。

北海道の建築 巡回展 2023 旭川・函館 会期終了

「北海道の建築展 2022」の巡回展が３都市（旭川・函館・釧路）を巡っています。旭川地区の会期中（6月15日～7月18日）には、毎週土曜日にギャラリートークを５回開催。うち３回は、圓山彬雄氏、鳥海良晴氏、上遠野克氏による直々の作品解説が行われ、とても貴重な機会となりました。会場が旭川駅内にあることや、ADW（あさひかわデザインウィーク）と会期を重ねたこともあり、市内はもとより全国、全世界から多くの来場があり、入場者数は約1500人となりました。また、函館地区での巡回展（会期：7月21日～23日）も無事終了しました。続いて、釧路地区の巡回展（会期：10月5日～8日）が開催予定です。巡回展の様子は改めてご報告いたします。

旭川会場の様子（会場：中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館ステーションギャラリー）

2023 年度 通常総会・意見交換会を開催

2023年5月17日、設計会館会議室にてJIA北海道支部通常総会が開催され、第1号から第6号までの議案が全て承認されました。その後、JIA北海道支部学生卒業設計コンクール2023の表彰式が行われ、総会の最後には、JIA佐藤尚巳会長から「建築家資格制度の整理に向けて―頼りになる建築家のブランド・存在価値の向上―」と題したご講演をいただきました。佐藤会長の設計した作品の紹介から始まり、建築家資格制度についての構想を紹介いただき、支部会員とも活発な意見交換がなされました。そして、会場をグランドホテルに移し、久しぶりに多数の来賓を迎えた意見交換会が開催されました。東海支部から大瀧支部長も来札され、「JIA建築家大会2023常滑」のPRも行われました。

AIJ ― JIA ジョイントセミナー 2023 を開催

2023年6月29日、日本建築学会北海道支部とJIA北海道支部とのジョイントセミナーがZoomにて開催されました。米田建築学術グループリーダーの司会の下、北海道大学大学院教授で日本建築学会前北海道支部長の菊地優氏から「今、免震が熱い」という演題でのご講演をいただきました。

法人協力会が道東地区会商品説明会を開催

2023年7月4日、釧路市生涯学習センター「まなぼっと」にて、法人協力会14社による商品説明会が開催されました。

第 6 回 北海鋼機デザインアワードの応募登録開始

第6回北海鋼機デザインアワードの応募登録を2023年7月1日より開始いたしました。今回より、審査委員長に北海道大学准教授の松島潤平氏を迎え、「鉄がつくるこれからの原風景」というテーマを携えた新たなデザインアワードとなります。審査員長の「文化的成熟を経て生まれる、人・場所・条件によって異なる鉄・板金の多様なマテリアリティに基づいたこれからの北海道の原風景はどのようなものになっていくのでしょうか。今回のアワードが応募者の皆様と考え、展望する一つの契機となることを期待しています」というコメントにあるように、応募者の皆様とこれからの原風景を考えるアワードとなることを期待しています。皆様の応募を心よりお待ちしております。

（詳しくは北海鋼機株式会社のホームページhttps://www.hkoki.co.jp/ をご覧ください。応募要項・応募用紙をダウンロードできます）

HOKKAIDO ARCHITECTS の横顔　vol.03

発行日　2023年9月8日

発行所　公益社団法人 日本建築家協会 北海道支部
〒060-0806 札幌市北区北6条西6丁目2番地 設計会館701号室
TEL.011-788-7491　FAX.011-788-7470
URL.http://www.jia-hok.org/

発行人　小西彦仁

編集人　石塚和彦［広報グループ］

制作協力　登尾未佳（編集制作）
山崎一平（デザイン）